

内子 The 文楽 2025 生誕 150 周年高橋龍太郎記念公演

旧家のお座敷ならではの近くで観る人形浄瑠璃文楽。そして龍太郎噺を太夫と三味線で披露

◆文楽実演「艷容女舞衣く酒屋の段」の一場面「お園のくどき（さわり）」を上演

はですがたおんなまいぎぬ

「お園のくどき」は人形浄瑠璃文楽の代表的な情愛描写の一つとして知られる場面であり、主に女性の切ない恋心や葛藤を描いた名場面です。この「くどき」とは、登場人物が心の内を訴える長台詞（モノローグ）で、観客に深い感情移入を促す構成となっています。「さわり」とは、演目全体の中で特に感情の高潮に達する部分を指し、ドラマ的な見せ場です。

一 お園の切々たる心情表現

夫（半七）はんしちの浮気を家族に責められ孤立する中、妻のお園はそれでも恋する半七への思いを募らせる中で、報われない恋や女性としての立場、嫉妬や諦めといった複雑な感情をくどきの形で吐露します。このくどきの台詞は情感豊かで、観客の心を打ちます。

二 義太夫節の迫力と情感

この場面では義太夫（語り）の表現力が重要です。お園の内面の揺れ動きを、太夫（語り手）が巧みに抑揚をつけて語り分け、三味線が情緒を支えることで、観客の感情を深く揺さぶります。

三人形の細やかな動き

お園の人形は、繊細な動きで感情を表現します。手や首のかすかな震え、視線の流し方、衣装の扱いなど、人形遣いの高度な技術が必要とされ、文楽の人形芝居の魅力が凝縮された場面です。

四 女性の情念の象徴的描写

「くどき」は、単なる愛の嘆きではなく、女性の情念、すなわち人間の業や心の奥底に潜む執着をも象徴的に描いています。この点が文学的・芸術的に高く評価される理由でもあります。

◆新作の素浄瑠璃「内子町情 龍太郎噺く蕎麦」を上演

なまけのりゅうたうばなし つた

高橋龍太郎翁は、明治・大正・昭和を日本の麦酒業一筋に生き、戦後は政治や経済、スポーツ分野でも活躍した内子町出身の偉人。今年、生誕百五十年を迎えることを記念し、龍太郎翁の生家で、龍太郎翁を題材にしたオリジナル素浄瑠璃を披露いたします。町の劇団が台本を手がけ、三味線弾きの鶴澤燕三さんに義太夫節を作っていただきました。乞うご期待！



主催

内子座文楽公演実行委員会、内子町、内子町教育委員会

制作協力

公益財団法人 文楽協会

後援

愛媛県、愛媛県教育委員会、公益財団法人愛媛県市町振興協会、愛媛県指定文化財文楽保存協議会、一般社団法人愛媛県観光物産協会、一般社団法人内子町観光協会、内子町文化協会、内子町文化創造事業実行委員会、NHK 松山放送局、南海放送、テレビ愛媛、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、愛媛新聞社、読売新聞松山支局、朝日新聞松山総局、毎日新聞松山支局、日本経済新聞社松山支局、産経新聞社、日本航空株式会社松山支店、アサヒビール株式会社

交通のご案内

○松山自動車道
松山 IC～内子・五十崎 IC 経由で約 30 分
○JR 松山駅～JR 内子駅、特急約 30 分。内子駅から徒歩約 20 分

